

目的の評価

全学学類・専門学群代表者会議
学内行事委員会

1. 第45回筑波大学学園祭「雙峰祭」目的

「筑波大学学園祭は、学生のみならず、教職員を含めた大学全体、そして地域の力があって成り立っている。本年度の学園祭は筑波大学に関わる人々がそれぞれ自らの活動を表現・発信し、普段筑波大学に足を運ばない人にとっても『開かれた』学園祭とし、来場者を含む各々が学園祭に参加することによって、これを感じ取る場とする。」

2. 項目ごとの評価

2.1 「筑波大学に関わる人々がそれぞれ自らの活動を表現・発信し」

実施された企画の一覧を見ても分かる通り、今年度の学園祭においても学生・教職員問わず非常に多くの筑波大学関係者が企画に携わり、様々な形でその活動を表現し発信していた。学生や教員が自らの研究を紹介する場や国際色豊かな企画、広大な敷地を活用した会場設営などを通して、来場者に様々な視点から本学の特色を伝えることができたと考えられる。来場者を対象に行ったアンケートには、このような企画の多様性を高く評価するコメントが寄せられた。その一方で、前回に比べて学術的な企画が減少したことを惜しむ声が散見され、こうした来場者の期待にどのように応えてゆくかが今後の課題となる。

2.2 「普段筑波大学に足を運ばない人にとっても『開かれた』学園祭とし」

今年度は北海道から九州まで全国各地から多くの人が訪れ、学内で催される様々な企画を見て回った。来場者へ配布する地図のわかりやすさは昨年度からの課題であったが、今年度新たに作成してパンフレットやWeb上に掲載した地図は来場者から好評であり、大学構内に不案内な来場者の大きな助けになったことがうかがえる。今後も来場者から寄せられた問題点の改善を通して門戸が広がってゆくことに期待したい。

2.3「来場者を含む各々が学園祭に参加することによって、これを感じ取る場とする」

企画を運営する側だけでなく来場者側も主体性をもって参加できるような企画が多く見られ、好評であった。特に、大学で行っている研究の内容を体験を通して紹介する企画が特徴的であり、本学の学生や教職員の活動への理解を来場者に深めてもらう上で効果的だったと考えられる。

3. まとめ

以上を踏まえ、今年度の学園祭の目的は概ね達成されたと判断する。昨年度生じた問題への的確な対処がなされたことで、普段筑波大学にあまり関わりのない人がより安心して学園祭を回ることができるようになり、「開かれた大学」という本学の建学理念に沿ったものになってきているのではないかと考える。今後も学術的企画の増加や案内情報の更なる充実などを通して、来場者に本学の特色をより効果的に伝えられるような学園祭となってゆくことを期待したい。